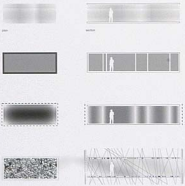
私たちの住まいを取り巻く環境は利便性、快適性を軸に様々に変化してきた。
そのなかでかつて日本の住宅が持っていた境界空間における自然をゆるやかに内部空間へと導くような操作は失われ、境界はより強固なものへと姿をかえていった。それはまた、現代住宅における自然との乖離、過剰な気密性への要因ともなった。
現代住宅における利便性の追求は依然として続いている。更に今日ではフレキシビリティ、オリジナリティなどもまた求められる。つまり各住戸に対し、プラン的操作がなされることは望ましくないということでもある。

ここではむしろ住戸部分を可変的なブラックボックスとして捉える。ブラックボックスとしての住戸と、外部つまり自然とをゆるやかにつなぐものとしてブラックボックスを覆う外皮を用意する。
それは流動的自然というものを視覚的に見せるための装置である。風という曖昧なゆらぎを生む自然現象を空間の様相へと変換する。それにより日本の住戸がかつて持っていた外部から内部、内部から外部へ向けてのヒエラルキーを起こす要素を抽出する。そしてブラックボックスとしての住戸をかたちづくるのは、自然要素を浸透させるスポンジのようなものである。

外皮が自然を受け、スポンジがヴォリュームとしてそれを浸透させる。そして空間は自然とともにゆらぎはじめる。

concept drawing



日本住宅
住宅において、自然と人との関係は非常に緩やかなものであった。内と外とは柔らかく仕切られ、プランにおいても、流動的な表情を持ち合わせていた。

現代住宅
コピーアンドペーストの計画により、プランは固定され、効率を追求した住宅は自然から隔離されていった。
更に現在、社会状況の変化に伴い、住宅内部のカスタマイズ性、フレキシビリティが求められている。

操作1
プランに流動性が求められ、住宅としての箱はブラックボックス化する。ブラックボックス化した住居を外皮で覆うことにより、住宅は表層において、自然との接点を持つ。

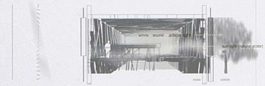
操作2
住宅をヴォリュームとしてスポンジ化させることにより、表層におけるリフレクションを、住宅全体へと浸透させる。
住宅は風という流動的自然現象によりゆらぎはじめる。

Diagram

外皮
風という流動的自然現象を受け、表層にゆらぎを生み出す装置として、回転式ガラスルーバーを外皮として用意する。

Sponge
外皮が抽出した要素を住居が持つヴォリューム全体へと浸透させるスポンジ的機能を持つものとして、風を受け揺らぐ植物をイメージし、それを幾何学的パターンへと落とし込む。躯体全体をそのパターンで構成することにより住居はヴォリュームとしてゆらぎを浸透させる。また、幾何学的パターンによって構成される躯体全体は、気候（太陽高度、風向き）によりその密度を変化させる。

outer skin diagram



inner perspective